

Haka Ta
博 多 35

—博多遺跡群第55次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第327集

1993

福岡市教育委員会

Haka Ta
博 多 35

—博多遺跡群第55次調査—



1993

福岡市教育委員会

序

JR博多駅から博多湾をのぞむ一帯は、弥生時代以来大陸文化の窓口として栄えたところであり、中世には貿易都市「博多」として繁栄を極めたところです。

この博多の町も、近年は都市部の再開発が急速に進み、80次を超える発掘調査が実施されています。大量の輸入陶磁器をはじめとする多種多様な遺物の発見は、まさに国際貿易都市「博多」の繁栄を彷彿とさせるものがあります。

今回報告する第55次調査では、町割りを区画する磁北方向の溝とそれに棟を並べた掘立柱建物跡が発見された。中世都市「博多」の成り立ちとそこに息づく庶民生活を物語るものとして貴重な資料です。

本書はこれらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には多くの方々のご指導、ご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成5年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井 口 雄 哉

.....れいげん.....

- 本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区奈良原61番の1におけるビル建設に先立って、1989年（平成元年）8月から9月に緊急調査した博多遺跡群55次調査の発掘調査報告書である。
- 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
- 遺構は呼称を記号化し、土壌をSK、井戸址をSE、ピットをSPとし、その後に遺構Noをつづけた。遺構Noは各面ごとにすべての遺構を通して01から始まる2桁のNoを付し、その番頭に検出面を示す1~2の数字を付した3桁の数字で表示した。
- 本書に掲載した遺構の実測は、小林義彦と椎村嘉長が、また、遺物の実測は、小林と森木朝子が分担してあたった。
- 本書に掲載した遺構・遺物の製図は、小林・森本・椎村佳公恵が分担してあたった。
- 本書に掲載した写真は遺構・遺物とも小林が撮影した。
- 本書の執筆は、陶磁器を森本が、その外は小林が担当した。
- 本報告に係る遺物・記録類は一括して福岡文化財センターに保管している。
- 本書の編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：8942 遺跡番号：HKT-55 分布地図番号：49-Δ-1		
調査地址：福岡市博多区奈良原町61番の1		
工事面積：190m ²	調査対象面積：190m ²	調査実施面積：128m ² (× 2)
調査期間：1989年8月11日～9月22日		

本文目次

序

I.はじめに	1
1. 調査にいたるまで	1
2. 調査の組織	1
II.立地と歴史的環境	3
1. 立地と歴史的環境	3
2. 地形と地質	6
III.調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 第1面の調査	7
(1) 井戸跡	8
(2) 挖立柱建物跡	10
(3) 土壙	12
3. 第2面の調査	18
(1) 井戸跡	18
(2) 土壙	19
(3) 溝遺構	24
4. ピットと包含層の遺物	24
IV.おわりに	26

挿図目次

Fig. 1. 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2
Fig. 2. 博多第55次調査地点位置図 (1/9,000)	4
Fig. 3. 調査区周辺現況図 (1/400)	5
Fig. 4. 博多第55次調査地点地質柱状模式図	6
Fig. 5. 第1面遺構配置図 (1/100)	8
Fig. 6. 158号井戸実測図 (1/80)	9
Fig. 7. 158号井戸出土土器実測図 (1/4)	10
Fig. 8. 180~182号建物跡実測図 (1/100)	11
Fig. 9. 101・102号土壙実測図 (1/30)	12
Fig. 10. 101号土壙出土土器実測図 (1/4)	12

Fig.11.	104号土壤実測図（1/30）	13
Fig.12.	104号土壤出土土器実測図（1/4）	13
Fig.13.	103・105号土壤実測図（1/40）	14
Fig.14.	145～148・152・156・162号土壤実測図（1/40）	15
Fig.15.	土壤出土土器実測図（1/4）	16
Fig.16.	第2面遺構配置図（1/100）	17
Fig.17.	201号井戸実測図（1/80）	18
Fig.18.	201号井戸出土土器実測図（1/4）	19
Fig.19.	208・209・222・228・242号土壤実測図（1/40）	20
Fig.20.	222・228・242号土壤出土土器実測図（1/4）	21
Fig.21.	248・250・252号土壤実測図（1/40）	22
Fig.22.	223・224・227・255号土壤出土土器実測図（1/4）	23
Fig.23.	233号溝実測図（1/80）	23
Fig.24.	土鍤実測図（1/2）	24
Fig.25.	銅鏡拓影（1/2）	24
Fig.26.	包含層出土土器実測図（1/4）	25

図版目次

- P L. 1. (1) 第1面調査区全景（西より） (2) 第1面調査区全景（南より）
 (3) 158号井戸（西より）
- P L. 2. (1) 101号土壤（北より） (2) 102号土壤（東より）
 (3) 103号土壤（西より） (4) 104号土壤（南より）
 (5) 145・146号土壤（南より） (6) 148号土壤（西より）
- P L. 3. (1) 第2面調査区全景（西より） (2) 180・181号建物跡（西より）
 (3) 182号建物跡（南より）
- P L. 4. (1) 201号井戸（南より） (2) 201号井戸土層断面（西より）
 (3) 201号井戸枠検出状況（西より）
- P L. 5. (1) 222号土壤（北より） (2) 228号土壤（南より）
 (3) 242・243・250号土壤（北より） (4) 250号土壤（南西より）
 (5) 227号土壤（南より） (6) 233号溝（南より）
- P L. 6. 第1面出土土器（1/4）
- P L. 7. 第1・2面出土土器（1/4）
- P L. 8. 第2面・包含層出土土器（1/4）

I. はじめに

1. 調査にいたるまで

中世に貿易都市として栄えた「博多」は、弥生時代より大陸文化の受入口として長い歴史をもち、その町並みの下には幾層にも重なった様々の遺構が眠っている。この博多の町も都市空間の高度活用を図った再開発事業が進み、高層ビルの建設には日を見張るものがある。近年はこの波が、「沖ノ瀬」の奈良屋町から神原町にまで及んでいる。

博多遺跡群の第55次調査地点は、博多区奈良屋61番の1にあり、博多湾にむかって突き出した「沖ノ瀬」の北西側縦斜面上にあたる。周辺には博多の豪商「神原宗満」の居敷跡と推定されている巣国神社が近接している。

こうした中で、日本経済新聞社では奈良屋町に所在する社屋の建替えが計画され、その旨の申請がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では、申請地が博多遺跡群内の「沖ノ瀬」上にあり、周辺部でも該期の遺構や遺物が検出されていることから試掘調査を実施した。その結果、現表土下1.7mで遺物包含層が、1.9mで中世の遺構が確認され、発掘調査による記録保存の必要性が生じた。

発掘調査は、社屋建設の工程上まず基礎杭の打設を先行し、次に施工業者による現地表下1.6mまでの表土層のすき取りを実施した。その後1989(平成元)年8月10日より攪乱層の除去に着手し、2層の遺構面を確認して9月22日に終了した。

なお、発掘調査にあたっては施主の日本経済新聞社や施工に当たられた大成建設株式会社の方々には物心両面にわたるご理解とご協力をたまわった。末筆ながら記して謝意を表します。

2. 発掘調査の組織

調査委託 日本経済新聞社 新井 明

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係

庶務担当 飛高憲雄(第1係長) 横沢一男(第2係長) 松延好文 吉田真由美

調査担当 小林義彦

補助員 梶村嘉長

調査・整理作業 尾園晃(九州大学) 岩隈史郎 篠崎伝三郎 吉川春美

吉弘隆二 大瀬良清子 木村良子 近藤澄江 武田潤子 津川真千代

土斐崎孝子 馬場イツ子 松本藤子 村崎里子 村田敬子 吉住シズエ

また、発掘調査・整理報告では、大庭康時(福岡市埋文課)、森本朝子氏の助力を得た。



1. 博多55次 2. 博多遺跡群 3. 堅粕遺跡群 4. 吉塚本町遺跡群 5. 吉塚遺跡群 6. 比恵遺跡群 7. 那珂遺跡群
 8. 那珂深ラサ・那珂君休遺跡 9. 板付遺跡 10. 錦岡遺跡 11. 五十川高木遺跡 12. 井戸遺跡群
 13. 日佐遺跡群 14. 三宅庵寺 15. 菊多目遺跡 16. 野多目古墳遺跡 17. 須玖唐製遺跡 18. 須玖
 永田遺跡 19. 須玖岡本遺跡 20. 須玖四丁目遺跡 21. 赤手遺跡

Fig. 1. 周辺遺跡分布図(1/50,000)

II. 立地と歴史的環境

1. 立地と歴史的環境

三方を三郡山系と背振山系の山塊に囲まれた福岡平野は、北の博多湾にむかって開口し、平野を貫流する御笠川と那珂川の二筋の流れは河口を接して博多湾に注ぐ。博多遺跡群はこの両河川に挟まれた博多湾岸沿いの砂丘上に立地し、南は旧比恵川によって画される。

博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て近世まで連続とつづく大複合遺跡であり、中世には泉州埠と並ぶ貿易都市として繁栄を極めたところである。この博多遺跡群の調査は、1977（昭和52）年の高速鉄道祇園町工区の調査に端を発し、一連の高速鉄道や都市計画道路博多駅築港線関係の調査をはじめ80次におよぶ調査の結果、次第にその姿を現わしつつある。

博多遺跡群を概観すると、その初現は弥生時代中期前半に遡る。祇園町交差点を中心とする古砂丘上に円形住居跡や壇棺墓群が立地する。ここは博多湾のはば中央部で、湾の最高所にある。弥生時代後期になると遺跡は南の後背地に拡がりを見せる。

古墳時代になると、砂丘の進行に伴って北の上呉服町周辺まで拡がるが、遺跡の中心はまだ博多湾の最高所にあり、竪穴住居跡や方形周溝墓が調査されている。また、第28次調査区では、墳丘長56mを越える5世紀初頭の前方後円墳が確認されている。

536（宣化1）年に「那の津」の官家が設置されて以降になると、対外貿易の拠点としての性格を強め、遺跡は博多湾全域に拡がる。688（朱鳥3）年に初見する筑紫館、842（承和9）年以降に現れる太宰府鴻臚館は、博多遺跡群から入海ひとつを隔てた丘陵上に位置する。遺物も鴻臚館式瓦、老司式瓦、皇朝十二鏡、円面鏡、石帯、墨書須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器の外に越州窯系青磁、長沙窯系陶器等の輸入陶磁器が多く出土し、官家の色彩の濃い施設の存在を想起させるとともに貿易都市としての性格を強めていったものと思われる。909（延喜9）年の遣唐使の廃止は私貿易を促すこととなり、古代末から博多は対宋貿易の中心地となる。発掘調査で最も多く検出される遺構や遺物は11世紀後半から13世紀前半のものであり、夥しい量の輸入陶磁器が出土するのもこの時期である。また、11世紀後半には博多湾北限の潟が砂州状に埋め立てられ、呉服町交差点付近で沖ノ瀬と繋がる。

鎌倉時代には沖ノ瀬の開発が進み、博多瀬と一体化して都市「博多」を形成する。この沖ノ瀬と博多瀬に挟まれた西側の入江が袖の瀬と推定されている。

室町時代には九州探題が置かれたが、幕府権力の衰退とともに貿易権益を巡る争奪戦が筑前の小氏氏、豊後の大友氏、周防の大内氏によって繰り返され、1586（天正14）年の島津氏による焼き討ちによって灰燼に帰す。その後、豊臣秀吉による太閤街割りとして復興され、朝鮮出兵の兵站基地として活況を呈したが、1639（明正16）年の鎖国令により貿易都市としての終焉を迎える。



Fig. 2. 博多第55次調査地点位置図(1/9,000)

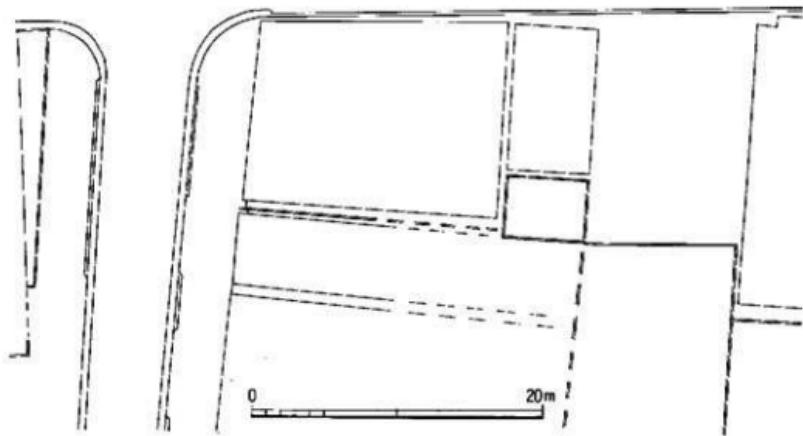
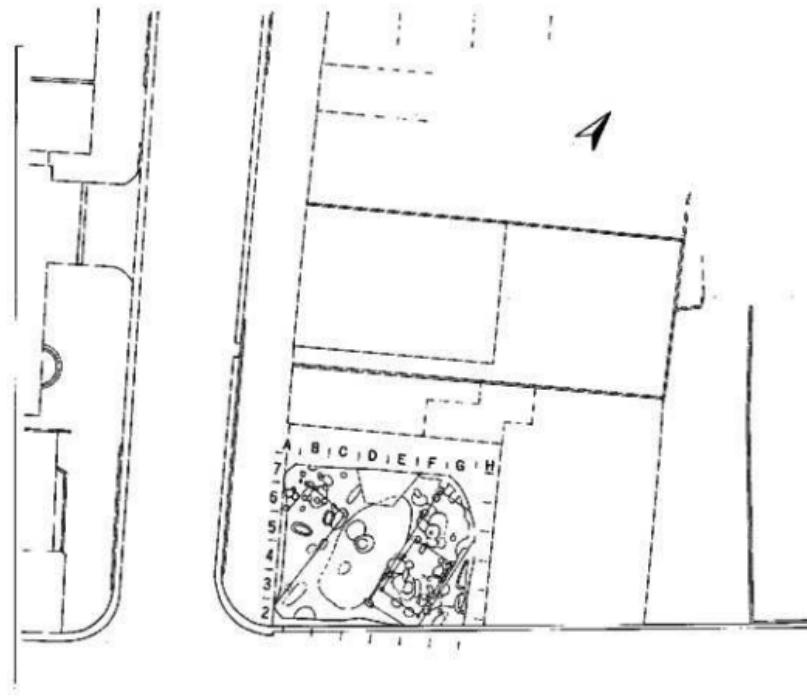


Fig. 3. 調査区周辺現況図(1/400)

2. 地形と地質

博多遺跡群の第55次調査地点は、福岡平野北端の海岸砂丘上にある。この福岡平野はその東側を三郡山系、南側と西側を背振山系に囲まれ、北方は博多湾にむかって開口している。

福岡平野は地形的には、海岸から山地までの奥行きが比較的短く、平野を貫流する河川の河床勾配が急なために扇状地が発達している。一方、地質的には、古生代の変成岩類とこれに中生代に貫入した花崗岩類を基盤とし、その上層に新生代古第三紀の堆積岩が覆うのが一般的である。博多遺跡群を含む北部では第三紀層が、南部では花崗岩が基盤層となっていることが多い。この基盤層中には北西～南東方向に走る多くの断層が認められ、そのうち高宮～晝尚～長浜を結ぶ「晝尚断層」は、地形的にも明瞭で断層線崖が発達している。したがって、博多遺跡群の南端部辺り（JR博多駅付近）では比較的浅くから第三紀層が分布するが、西にむかって深くなり、福岡城の東端部辺りでは約50mの深さに分布する。

平野部ではこれらを覆って第四紀層が堆積しているが、表して沖積層は薄く、海成層は東平尾～山王～塩原を結ぶラインより北にしか分布しない。また、この第四紀層は、河床勾配が急なことと平野後背部が主に花崗岩山地で囲まれていることから、扇状地性の真砂土の二次堆積物により構成されることが多い。

沖積層；深度は8.9mまで、層厚は8.4m。細粒砂～粗粒砂まで混入する粒径の不均一な土層で、最下部で粘性土分が若干混入する。

洪積層；深度は31.5mまで、層厚は22.6m。砂質土を主体とし、一部に粘性土層が混入する。砂質土層は石英砂が主体となる真砂土の二次堆積土層である。また、混入する礫も花崗岩の風化礫が主となる。

古第三紀層；深度31.5mからの土層で、淡灰色の砂質頁岩からなる。



Fig. 4. 第55次調査地点地質柱状模式図

III. 調査の記録

1. 調査の概要

第55次調査区は、博多遺跡群を形成する二つの砂丘のうち、海側にある沖ノ濱の中央部の北面、砂丘が博多湾にむかって傾斜をはじめる落ちぎわに立地する。

博多遺跡群は、弥生時代から中・近世までの大複合遺跡で、黄白色砂層の基盤層まで間には1~5mにも及ぶ遺物包含層が堆積している。この遺物包含層には幾面もの遺構面が重層的にあるが、堆積土壤の変化はほとんどないのが一般的である。また、一部に整地層等が確認されても面的な拡がりとして捉えられないのがほとんどである。このため発掘調査では、一定面まで意図的に掘り下げて遺構面を検出し、更にその包含層を掘り下げて下層の遺構面を検出するという方法を取った。

第55次調査区では、2面の遺構面を検出し、上層から第1面、第2面とした。第1面は遺物包含層の上面で確認した遺構面である。第2面は、この遺物包含層を取りのぞいた砂丘基盤層の黄白砂層上で検出した遺構面である。この第1面と第2面との間の遺物包含層は、層厚20~30cmで暗茶褐色土と黒褐色土からなり、14~15世紀代の遺物を含んでいる。遺構は、検出順に01からの通し番号を付け、その巻頭に検出面を示す1・2の数字を付けた3桁で表示した。しかし、それが各遺構の属する年代に必ずしも対応するものではない。また、遺物包含層は層位的には分層しうるが、面的には捉えがたいために一括して取り扱った。

発掘調査は、ビル建設の都合上矢板養生枠内に留め、ビル本体部の約130m²について実施した。調査は、まずビル建設の工程に併せて基礎杭の打設を先行し、矢板工事の完了後に客土層を取り除いて遺構の検出にかかった。このために狭小な調査区内には数本の基礎杭が柱状に立ち、調査の進捗を妨げるもとなつた。さらには、排土処理には一層の困難さが伴つたが、日々場外に搬出することで処理された。調査で検出した遺構面は、空町時代に位置づけられ、町割りを示す溝等を検出して9月22日に終了した。

2. 第1面の調査

第1面は、現地表下1.7mで確認した遺物包含層の上面で検出した遺構面で、標高は3.0mである。この第1面で検出した遺構は、井戸跡1基、掘立柱建物跡3棟、土壙15基とピット等がある。井戸跡は掘方が大きく、しかも調査区の中央に位置するところから土壤等の遺構は調査区の周縁に比較的まとまつた状況で分布する。また、ピットの中には、底面に平石を埋置して柱の根石をしているものもあり、掘立柱建物跡としてまとめ得たものの外にも幾棟かの建物跡が存在したものと思われる。

(1) 井戸跡 SE

第1面では、調査区の中央部に位置して1基の井戸跡を検出した。この井戸は掘方が大きく、そのために土壟等の遺構は調査区の周縁部にまとまる状況を呈している。

158号井戸 SE-158 (Fig.6・7, PL.1・6)

調査区の中央部にある素掘りの井戸跡である。井戸の掘方は、長軸8.7m、短軸4.0mの大きな長椭円形プランを呈する。井戸は、横出面から1.0~1.5m程度緩傾斜して掘り廻めた後に、小さな平坦面を造って更に2.0mの深さまで掘り込んでいる。このレヴェルで井筒を検出した。

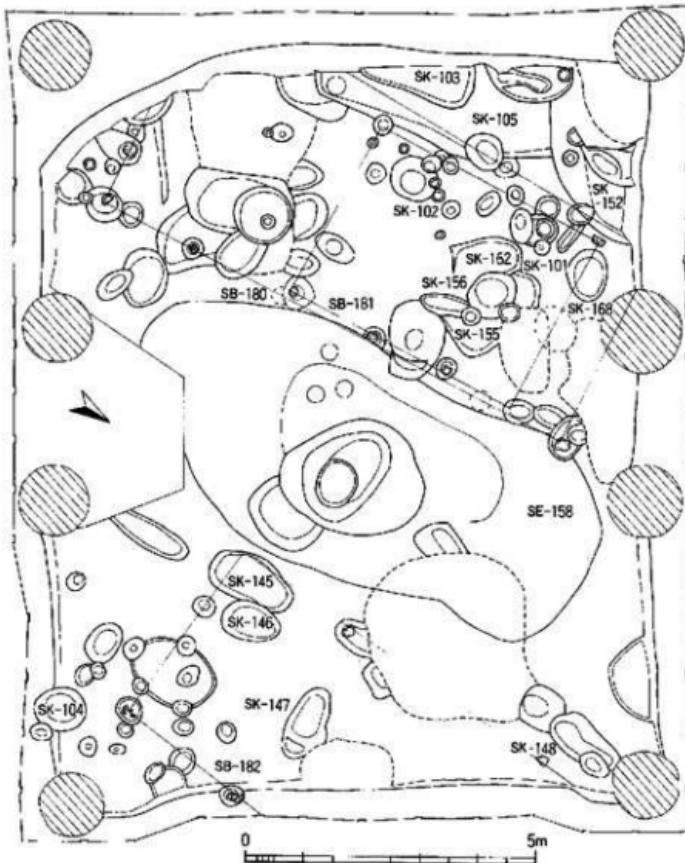


Fig. 5. 第1面遺構配置図(1/100)

井筒は、掘方中央部のやや東よりに位置し、径70~85cmの円形をなす。涌水のために未完掘であるが、井筒には木桶等を用いたであろうことが想定される。また、井筒検出面より40cm程下で、40×25cmの平石を検出した。廃棄に際して投棄されたものであろう。掘方の覆土からは、龍泉窯や同安窯系青磁のほかに白磁、牛頭象嵌青磁、天日碗のほか土師器が出土している。

1~7は回転糸切りの土師器である。調整は雑で、一部板状痕が認められる。内面はナデ調整する。1~3は皿、4~6は壺で少量の上、法量にもばらつきが大きく、一つのまとまりを見出すには困難がある。口径は皿が7cm強、壺は12cm強と見当をつけるに止めた。7は三足の香炉の低部で、糸切痕を残し、手びねりの三足を貼付けている。胸部外面は平滑に磨く。8~10は中國青磁である。8は無文碗で、灰色の土に微細な黒点が交じり、釉は緑みの灰色を帯びた透明ガラス質。見込に渦状に指痕が残り、高台削りも雑な粗製品である。釉は脛付、外底にはかかっていない。9は印文碗で、釉層が厚く、気泡が多く含んで不透明。施釉は高台を包み外底で輪状に釉はぎを行なうものであろう。体内壁を二本の平行線で5・6区に分け、その各々に各種の花を浮出しにする。残部では菊花が認められる。10は龍泉窯の青磁盤で、胎土はねずみ色でよく熔融している。褐色の緑色の釉はよく熔けるが、釉中に気泡多く半透明である。11・12は中國白磁で小片だが、皿と思われる。灰白色の胎土に、淡いオリーブを含む透明釉がかかる。12には内外面に縱方向の掻き落とし文が見られる。13は中國青白磁合子蓋である。胎土は黄白色でよく焼結し、淡い灰緑色を含んだ透明ガラス釉がかかる。型作りで浮文がある。14~16は李朝陶器。14はかすかに緑みのある灰色の無文皿で、外底の削りは渦状に刃跡を残している。15

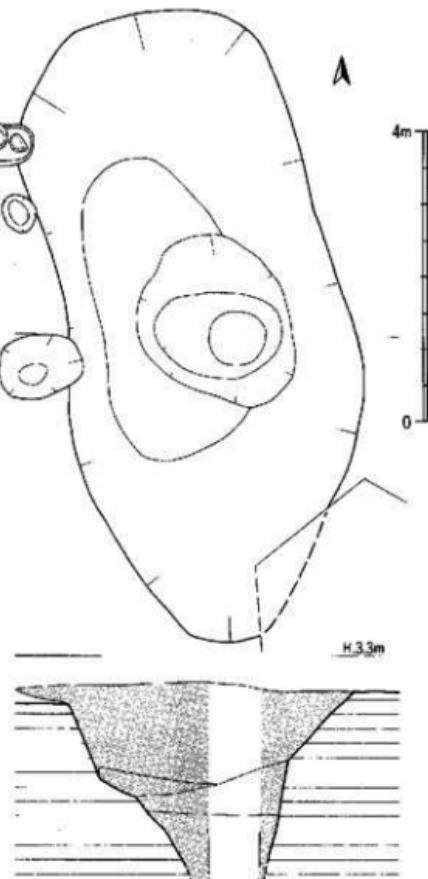


Fig. 6. 158号井戸実測図(1/80)

も皿で、見込に菊花文を白土で象嵌している。外底には指先で押し固めた様なへこみが多数重なっている。16は綠褐釉壺で、胎土は細かい黄褐色と褐色の土が、薄い層状に重なる。非常に薄作りで、折り返しの口縁を作り、胴部は叩き締めている。釉はよく熔けない不透明釉である。17は黒褐釉壺である。胎土は褐味の濃灰色、やや粗めで、大小の白砂が沢山混じる。釉は黒褐色の不透明な光沢釉である。肩には大きな叩き跡が切子のように見え、波うっている。沖縄で出土の多い陶器であるが産地不明。18・19は明代染付壺である。18は口縁外反、19は腰折である。

(2) 据立柱建物跡 SB

第1面では、井戸跡や土壤等の外にピットを検出した。このピット中には底面に1~3枚の平石や数個の円礫を敷いたものが検出された。これらの石は、軟弱な地盤中で柱を支える根石と考えられ、第2面で検出した同様の柱穴と併せて3棟の建物跡を復原した。ただし、調査区

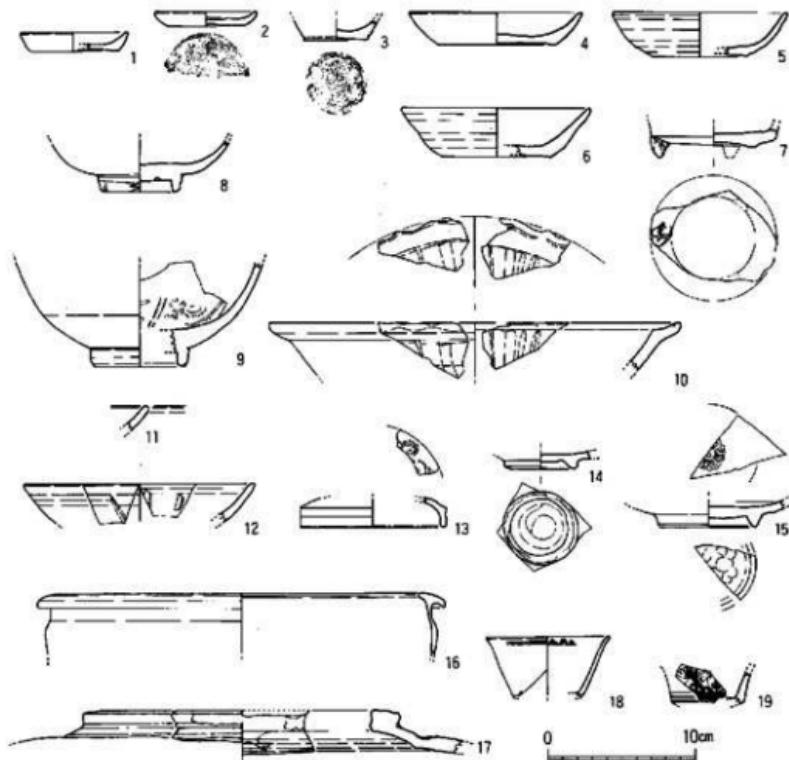


Fig. 7. 158号井戸出土土器実測図(1/4)

が狭小なためにその規模、構造には不詳な点もある。

180号建物跡 (Fig. 8, PL.3)

調査区の西側で検出した南北棟の建物跡で、主軸方位をN-10°-Wにとる。181号建物跡と重複し、同方向に柱筋をとる。礎石は、平側と南側妻柱の一部を残して消失しているが3×5間の規模に復原できよう。梁行全長は3.6m、柱間は0.9m・1.8m・0.9m。桁行全長は9.0mで、柱間は1.8mの等間になる。この建物跡は、第2面で検出した233号溝のすぐ東にあり、溝の流れに棟筋を同じくすることから密接な関わりをもつものと推定される。

181号建物跡 (Fig. 8, PL.3)

調査区の西側で検出した南北棟の建物跡で、180号建物跡と棟筋を同じくして重複している。梁行全長は3.2m、桁行全長は4.2m、柱間は1.6m・1.0m・1.6mで、建物は1×3間規模になるが、妻側には中柱が付き2×3間規模になる可能性も考えられる。柱穴には礎石がある。

182号建物跡 (Fig. 8, PL.3)

調査区の東側で検出した南北棟の建物跡で、180号建物跡から東へ約4mの距離にある。梁

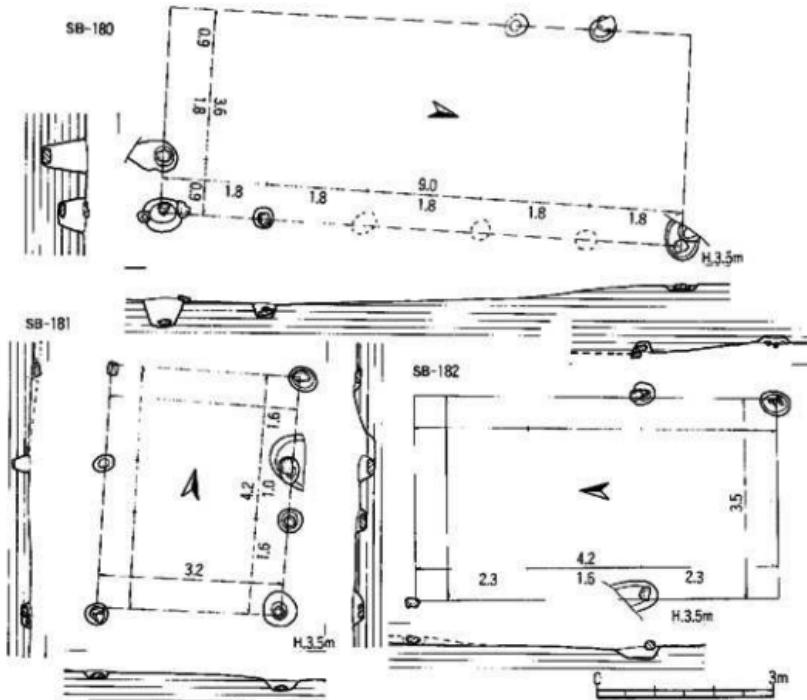


Fig. 8. 180~182号建物跡実測図(1/16)

行全長は3.5m、桁行全長は6.2mで、柱間は2.3m、1.6m、2.3mの1×3間規模であるが、妻側には中柱が付いて2×3間になる可能性もくはない。

(3) 土壙 SK

第1面では、調査区の全域で15基の土壙を検出した。しかし、調査区の中央部に大型の井戸跡があることから状況的には調査区の東西に分かれて分布する。これら土壙の中には、壁面が焼けているものや覆土中に炭片・灰等を含むいわゆる焼上壙とそうでないものの二種類があるが形状的には区分されない。平面プランは、円形～楕円形のものがほとんどで、それが時間的あるいは用途的な相違によるものかは判然としない。

101号土壙 (Fig. 9. 10. PL.2)

調査区の北西端で検出した焼上壙で、152号土壙の東にある。平面形は長軸92cm、短軸72cmの楕円形をなす。緩やかに立ち上がる壁面は深さ18cmを測り、断面形は逆台形をなす。浅い凹レンズ状の底面と壁際には炭粒を含んだ灰層が、上面には焼土粒が堆積していた。遺物は土師器と中国陶器片が少量出土した。

20・21は中国磁器。20は青磁盤で全面施釉の上、外底で輪状に釉はぎを行なっている。見込に印文、体壁にはヘラ文がある。淡い草色の釉は透明度が小さく、文様ははっきりしない。胎上は灰白色でやや粗く、微細な黒点が入っている。21は森田分類D群の白磁皿で、高台には抉りが入らない。黄みの白い土に微妙に茶を帯びた透明釉がかかる。骨付から外底は露胎。22は国産の土師質指鉢。内面に墨書きがある。使用のため指凹は減っている。

102号土壙 (Fig. 9. PL.2)

調査区の西端で検出した焼上壙で、土壙上面には建物跡の礎石がのっている。平面プランは、径75～85cmの円形をなし、壙底には灰層が薄く

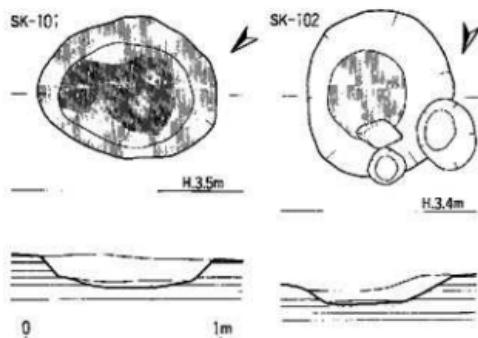


Fig. 9. 101-102号土壙実測図 (1/30)

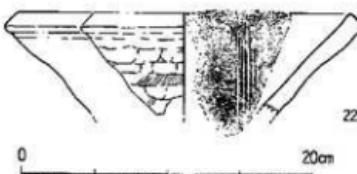
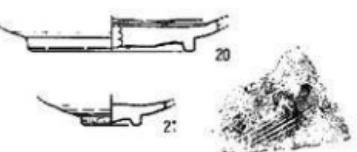
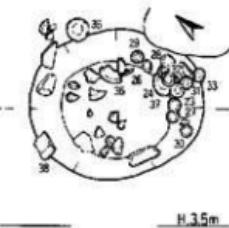


Fig. 10. 101号土壙出土土器実測図 (1/4)

堆積している。緩やかに立ち上がる壁面は深さ15cmを測る。底面は凹レンズ状をなし、断面形は逆台形を呈する。

103号土壌 (Fig.13, PL.2)

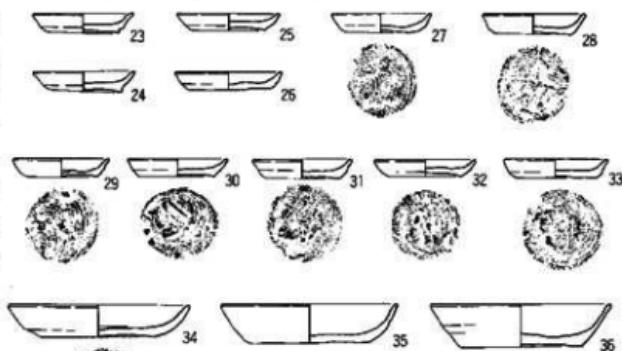
調査区の西端にある土壌で、105号土壌上に掘り込まれている。平面形は、長軸が2.0m程の長方形プランをなすものであろう。壁面は、深さ20cmで緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。覆土中には炭片が混入しており焼土壌の可能性も考えられる。



104号土壌 (Fig.11-12, PL.2)

調査区の東隅にある小型の土壌で、平面形は、長軸90cm、短軸75cmの橢円形を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは35cmを測る。底面は浅い凹レンズ状をなし、逆台形の断面形を呈する。覆土上層からは青・白磁片の外に土師皿がまとまって出土した。Fig. 11. 104号土壌実測図(1/30)

23~37は縦て回転糸切りの土師器。23~33は皿で口径6.9~7.4cm、器高1.2~1.5cm
で、平均口径7cm、
器高1.3cm。34~37
は壺で口径11.7~
12.5cm、器高2.3~
3cmを測る。38は口
径27.6cmの土鍋であ
る。紐作りされ、外面
には多量の煤がつく。
cm、器高1.2~1.5cm
で、平均口径7cm、
器高1.3cm。34~37
は壺で口径11.7~
12.5cm、器高2.3~
3cmを測る。38は口
径27.6cmの土鍋であ
る。紐作りされ、外面
には多量の煤がつく。



105号土壌

(Fig. 13・14.)

調査区の西端にあ
り、103号土壌より
も古い。平面形は、
長軸が3.5m以上に
なる大型のものであ
る。壁面は緩やかに
立ち上がり、深さは
45cmを測る。断面形
は逆台形をなす。

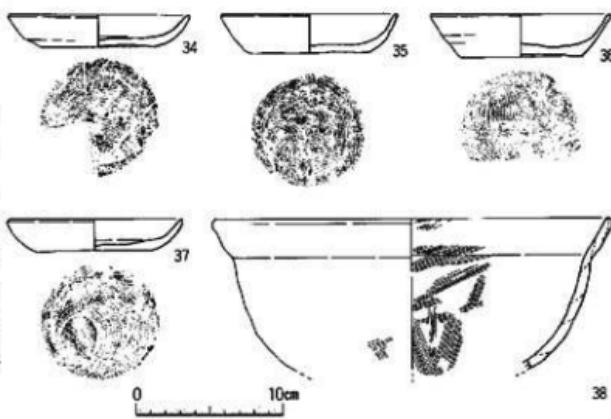


Fig. 12. 104号土壌出土土器実測図(1/4)

39は回転糸切りの土師皿で、口径8.4cm。40は青磁碗。胎土は粗い灰色で白砂を含む。釉は青緑色で透明性。見込に菊折枝文の印文がある。高台は竹節高台で疊付、外底は露胎である。

145号土壙 (Fig.13. PL.2)

調査区の東側にある土壙で、146号土壙に切られている。平面形は、長軸が150cm、短軸85cmの隅丸長方形をなす。断面形は逆台形をなし、壁高は15cmを測る。覆土は焼土粒、炭片が混入し焼土壙の可能性も残す。遺物は土師器の外に中国陶器や瓦質の指鉢片が出土した。

146号土壙 (Fig. 13. PL.2)

調査区の東側にある土壙で、145号土壙よりも新しい。平面プランは、長軸102cm、短軸67cmの梢円形をなす。深さ25cmの様面は緩やかで、

逆台形の断面形をなす。遺物は土師器、土策、龍泉窯系青磁片が出土している。

147号土壙 (Fig. 13 · 14.)

調査区の東側にある土壙で、158号井戸の東3mの距離に位置する。平面形は、長軸133cm、短軸65cmの梢円形をなす。東小口側には中段に小さなフラット面を造り、2段掘りの構造をなす。底面は中央部が窪む凹レンズ状をなし、深さは最深部で30cmを測る。遺物は土師器や龍泉窯系青磁片が少量出土した。

41は回転糸切りの土師器坏で口径12.5cm。

148号土壙 (Fig.13 · 14.)

調査区の北端にある焼土壙である。平面形は、長軸が140cm、短軸70cmの梢円形プランをなし、南北に主軸をとる。緩やかに立ち上がる壁面は深さ25cmを測り、舟底状の断面形を呈する。覆土上層には灰層が厚く堆積していた。遺物は土師器と中国陶器片が出土した。

42は李朝陶器小鉢。褐みの濃灰色の細かい胎土に白色の小砂が混じり、よく焼結している。地を彫り簡略化した回文と罔線文を白土で象嵌している。全体をかすかに茶みのついた透明釉で覆う。釉層は厚く、氷裂がある。43は土鍋で、口径27.4cm、器高12.3cmを測る。

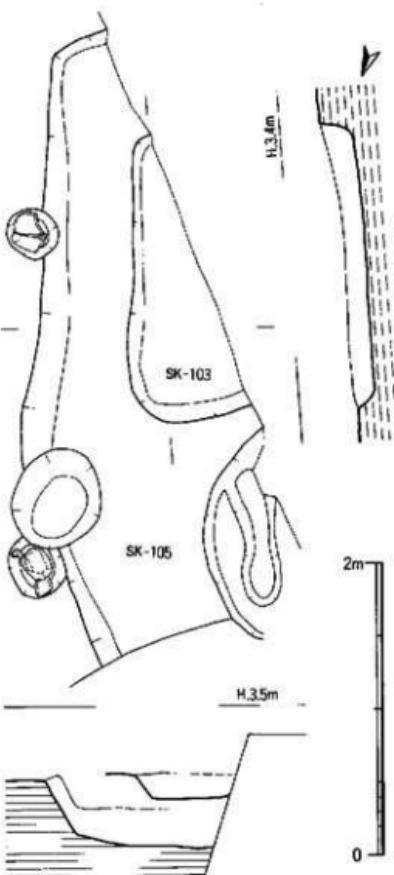


Fig. 13. 103 · 105号土壙実測図(1/40)

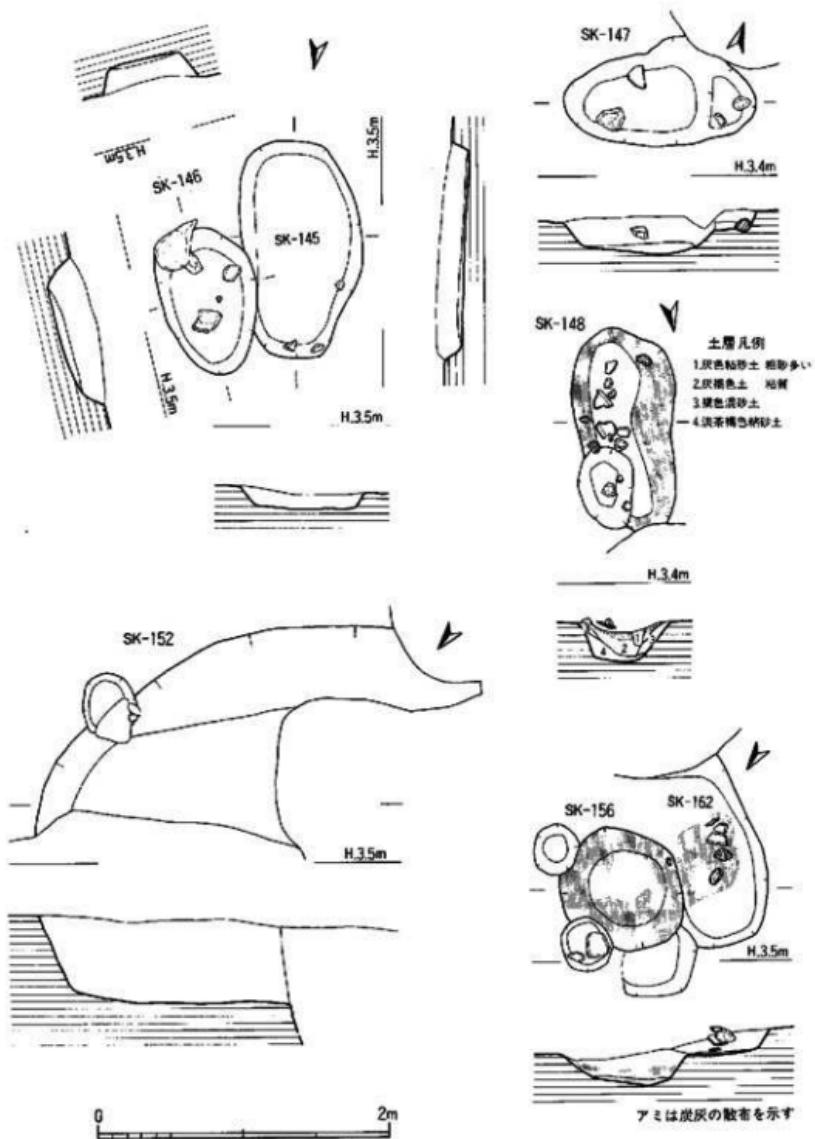


Fig. 14. 145~148・152・156・162号土壤実測図(1/40)

152号土壙 (Fig. 13.)

調査区の西端にある大型の土壙で、105号土壙を切っている。平面形は径が3～4m程の円形に復原できよう。深さは約55cmで、断面形は逆台形をなす。遺物は土師器や中国陶磁器が出上。

155号土壙 (Fig. 5.)

調査区の西側にある不整形の土壙で、156号土壙に切られている。平面形は長辺130cm、短辺80cmで、三角形状になろう。覆土は灰黄褐色土で、焼土粒を含んでいる。

44は同軸糸切りの土師器皿で、口径8.0cm、器高1.5cm。体部はヨコナデ、内底はナデ調整。

156号土壙 (Fig. 13・14)

調査区の西部にある焼土壙で、162号土壙よりも新しい。平面形は径80～90cmの円形をなし、深さは約30cm。四レンズ状の底面には灰が堆積していた。遺物は土師器、龍泉窯青磁がある。

45は口径13.5cmの土師器坏で、外底には板状痕がつく。46は口径24cmの滑石製石鍋である。

160号土壙 (Fig. 5)

調査区西側の156号土壙の南に隣接してある不整形の焼土壙である。平面形は一辺が約60cm

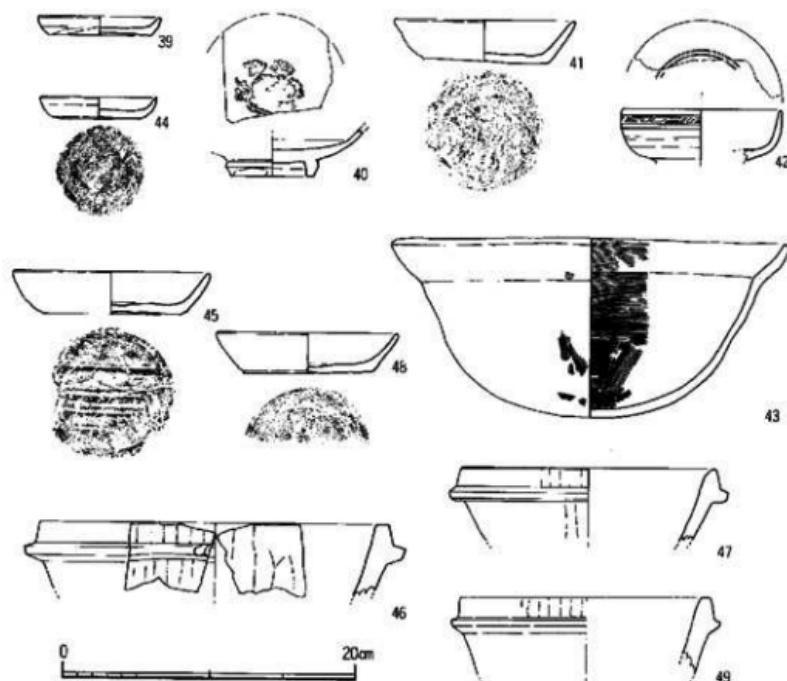


Fig. 15. 土壙出土土器実測図(1/4)

程の三角形状をなし、底面は浅く摺り鉢状に窪む。覆土には小砾に混じって炭粒を含み、遺物は糸切りの土師皿が2点と石鏡片が出土した。47は、口径17.6cmの滑石製石鏡である。

162号土壙 (Fig.13・14)

調査区の西部にある焼土壙で、東側は156号上塙に切られる。平面形は長軸140cm、短軸75cmの長方形プランで、深さは15cm。浅い凹レンズ状の底面には灰が堆積し、断面形は逆台形をなす。

48は回転糸切りの土師器坏で、口径12.5cm、器高2.8cm。49は滑石製石鏡で、口径は17.2cm。

168号土壙 (Fig.5)

調査区の北西部にある焼土壙で、101号土壙のすぐ東に位置する。平面形は、径が70~80cmの円形をなし、壁面は浅い摺鉢状をなす。覆土には炭粒を含み、中国陶器片が出土している。

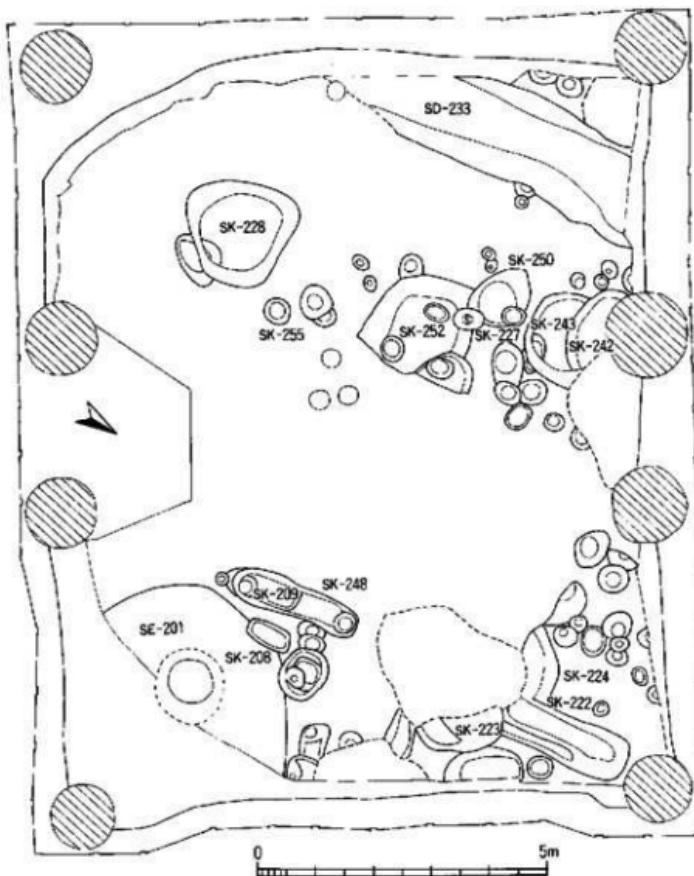


Fig. 16. 第2面遺構配置図(1/100)

3. 第2面の調査

第2面の遺構は、第1面の遺構ののる層厚20~30cmの遺物包含層を取り除いて検出した黄白褐色砂の基盤層上で確認した。標高は2.7mである。この第2面で検出した遺構は、井戸跡1基、土塹13基、溝遺構1条とピットがあり、井戸跡が東に偏してある。この中で、溝遺構は、ほぼ磁北方向にのび、その東側には第1面で復原した掘立柱建物跡が棟筋を同じくして並置している。これらは一体として該期の町割りの一面を示すものと推定されよう。

(1) 井戸跡 SE

第2面では調査区の東隅に偏して、木桶を井筒にした井戸跡を1基検出した。

201号井戸 (Fig. 16-17. PL.4)

調査区の東隅にある井戸跡である。掘方の平面形は、直径が約4.5mほどの円形プランになろう。壁面は1.7mほど緩やかに緩傾斜し、そこからほぼ垂直に掘り込んでいる。井筒には、直径が80cmの木桶を用い、掘方検出面より1.8mの所で検出した。井筒及び掘方内からは土器器や須恵質鉢の外に龍泉・同安窯系青磁碗、白磁碗、天目、中国陶器片等が出土しているが、量的には少ない。

50・52~54は中国陶器である。50は砂
まじりの粗い土で作って無釉の捏鉢の口
縁部小片である。52は天目茶碗で、褐色
みの灰色の、セメントのようなガチッとした
土味である。53は龍泉窯青磁碗で、
土は淡灰色で細かい。釉は灰オリーブ色
で、釉中に気泡多く不透明で氷裂がある。
口は強く内湾し、外縁には鏽蓮弁が削り
出されている。54は褐釉壺で、土は灰褐色
で細かく、白黒の少砂が少し混じる。
黒褐色の釉は釉層が薄く、やわらかい光
沢がある。幅広の鉢状口縁に灰白色の細
かい目土が付着しており、重ね積にして
焼いたことがわかる。55は李朝陶器鉢で
ある。褐味の灰色の粗い土に白砂が混じ
る。よく焼結している。釉は青みの灰白
色。厚めで氷裂がある。釉下に白色象

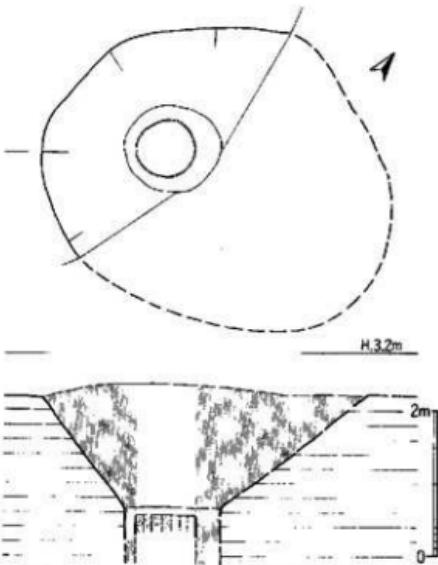


Fig. 17. 201号井戸実測図(1/80)

嵌があるが、象嵌はとても浅い。51は瀬戸の御皿である。56は瓦質の平らな容器である。蓋受けがあり、器外壁にみがきが見られる。57・58は瓦質の摺鉢である。

(2) 土壙 SK

第2面では、13基の土壙を検出したが、その分布は調査区の北半部にやや偏する傾向が窺われる。平面的には概ね円～長方形のプランを呈する。しかし、この中には断面が浅く不整形をなすものがあり、これらは一括して不整形土壙として取り扱った。また、これら土壙の形態的な差異が時間的あるいは用途によるものかは判然としない。

208号土壙 (Fig.18)

調査区の東側で検出した小型の土壙で、201号井戸を切っている。平面形は、長軸80cm、短軸40cmの長方形プランを呈し、深さは8～15cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は南側が低い凸レンズ状をなす。遺物は土師器皿と土鍋片が僅かに出土した。

209号土壙 (Fig.18)

調査区の東側にある土壙で、248号土壙の南半部を切っている。平面プランは、長軸135cm、短軸50cmの長方形を呈し、深さは15cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。覆土中からは土師器片が少量出土した。

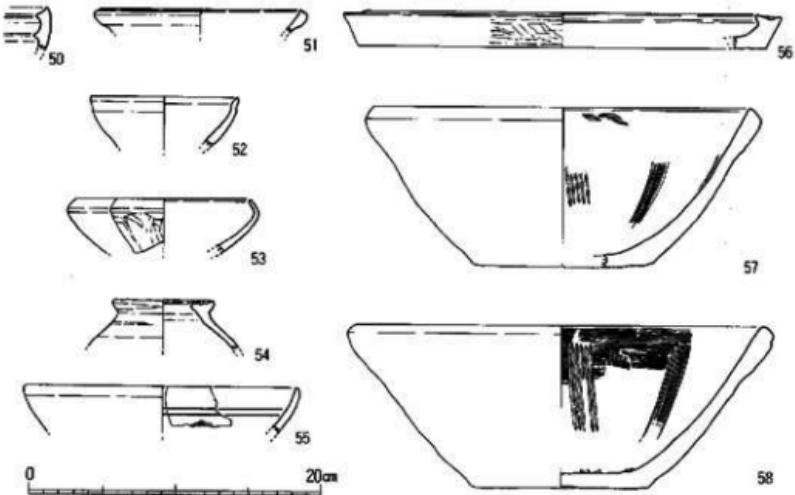


Fig. 18. 201号井戸出土土器実測図(1/4)

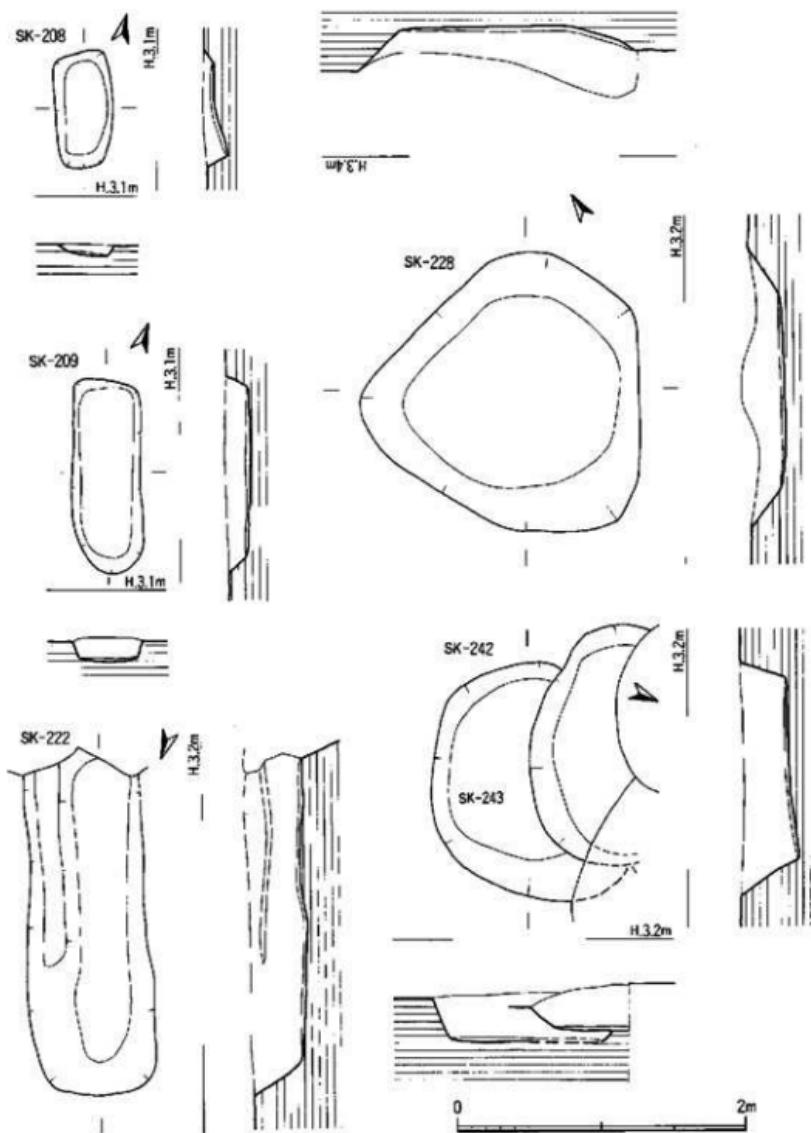


Fig. 19. 208・209・222・228・242号土壤実測図(1/40)

222号土壙 (Fig.18・19. PL.5)

調査区の北端にある。平面形は、長軸250cm、短軸85cmの長方形プランを呈し、N-16°-Wに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、東側壁には小さなフラット面が付く。底面にはゆるやかな凹凸があり、深さは40cmを測る。形状からして墓壙の可能性が考えられる。遺物は土師器の外に龍泉窯系青磁碗と白磁碗片が僅かに出土している。

59~61は回転糸切りの土師器。
59は皿で口径8.4cm、器高1.2cmである。
60・61は坏で、口径は12.0、12.4cm、器高は双方2.7cmである。

223号土壙 (Fig.16・19)

調査区の北東側にある土壙である。北側は222号土壙に、南半は搅乱層による削平を受けその全容は明らかでないが、径1.5m程の円形になろうか。東壁側にはフラットな面を造る。

64は中国白磁の底部である。土は淡灰色でこまかい。砂が少々入るが比較的よく磁化している。釉は茶のみの淡灰色、半透明。見込みで輪状の釉切があり、高台の端部に粉状の砂跡がある。

224号土壙 (Fig.16・19)

調査区の北側に位置する土壙で、222号土壙に切られている。径約2.5m程の円形プランをなす。深さは約40cmで、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土中からは土師皿や土鍋片が僅かに出土している。

65・66は回転糸切りの土師器である。65は皿で、口径8.4cm、器高1.2cm。66は坏で、口径13.2cm、器高2.9cmである。調整は、体部がヨコナデ、内底はナデて仕上げている。

227号土壙 (Fig.16・19. PL.5)

調査区の北東側にある小型の土壙で、243号土壙のすぐ南に位置している。平面形は、長軸85cm、短軸55cmの稍円形をなし、深さは20cm。壁面は緩やかに立ち上がり、凹レンズ状の断面形をなす。遺物は土師皿や同安窯系青磁皿が僅かに出土している。

67~69は回転糸切りの土師器。67・68は皿で口径9.2cm、7.9cm。器高は1.5cm、1.3cmで法量差が大きい。69は坏で口径12.9cm、器高3.3cmを測る。70は所謂同安窯系の青磁皿である。

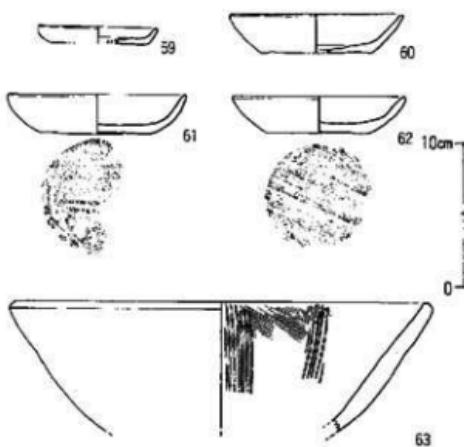


Fig. 20. 222・228・242号土壙出土土器実測図(1/4)

228号土壙

(Fig. 18・19, PL.5)

調査区の南西部にある大型の土壙で、252号土壙の南2mの距離に位置している。平面形は一辺が約2mの三角形に近い不整円形を呈し、深さは50cmを測る。断面形は逆台形をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。

62は回転糸切りの土師器坏で、板状痕が見られる。口径は12.0cm、器高は2.5cm。100は長さ4cm、径8mmの小型の土錐。

242号土壙

(Fig. 18・19, PL.5)

調査区の北東端にある土壙で、243号土壙を切っている。平面形は、径が170cm程の円形をなろう。深さは30cmで、逆台形の断面形をなす。遺物は土師器、須恵器、龍泉窯系青磁片等が出土した。

63は口径29.2cmの瓦質の摺鉢で、七本単位の摺目を立てている。

243号土壙

(Fig. 18, PL.5)

調査区の北西端にあり、北半部は242号土壙に切ら

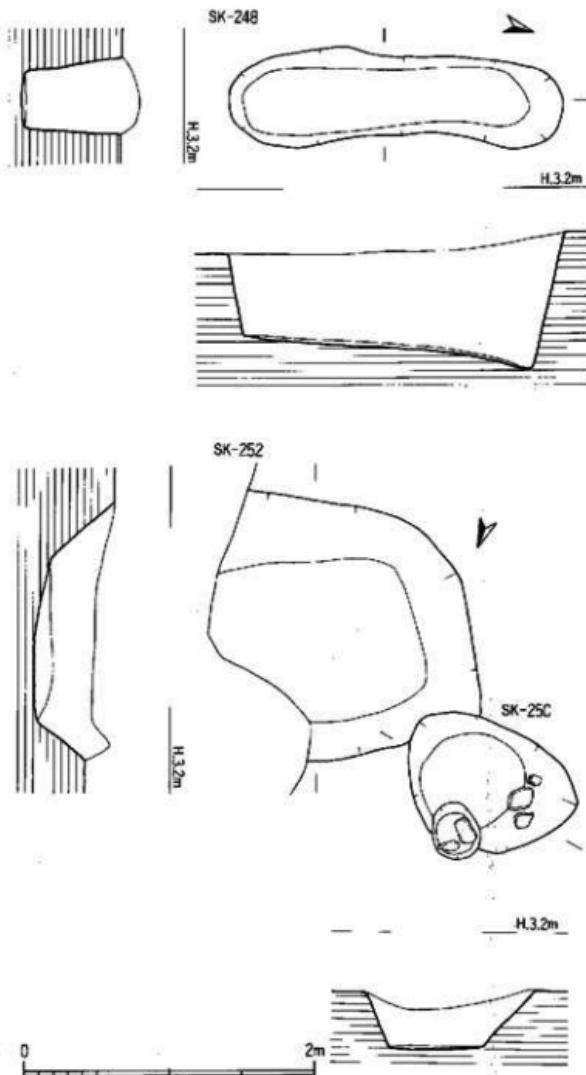


Fig. 21. 248・250・252号土壙実測図(1/40)

れている。平面形は直径が約160cmの円形プランをなし、深さは35cmを測る。壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。遺物は土師器や青磁、白磁片が僅かに出土した。

248号土壙

(Fig. 20)

調査区の中央部東より

にある土壙で、南半部は209号土壙に切られている。平面形は、長軸240cm、短軸65cmの長方形プランを呈し、深さは60~90cmを測る。壁面は急峻に立ち上がり、底面は北にむかって緩やかに下がる。形状からして墓壙の可能性を考えられる。覆土中からは土師器片が僅かに出土した。

250号土壙 (Fig. 20, PL.5)

調査区の西部にある小型の土壙で、252号土壙の北西端を切っている。平面形は、長軸120cm、短軸90cmの楕円形を呈し、深さは45cmを測る。壁面は急峻で、断面形は箱型に近い。遺物は土師器、瓦質鉢、白磁片が僅かに出土している。

252号土壙 (Fig. 20)

調査区の中央部西よりにある大型の土壙で、北西隅は250号土壙に切られている。平面形は、長軸250cm、短軸180cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは55cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。遺物は土師器片が僅かに出土した。

255号土壙 (Fig. 16・22)

調査区の南西部にある不整形土壙で、228号土壙のすぐ北に位置する。平面形は、径45cm程の円形で、浅い凹レンズ状をなす。

71は回転糸切りの土師器坏で、口径12.4cm、器高3.1cmを測る。調整は体部がヨコナデ、内底はナデで仕上げている。

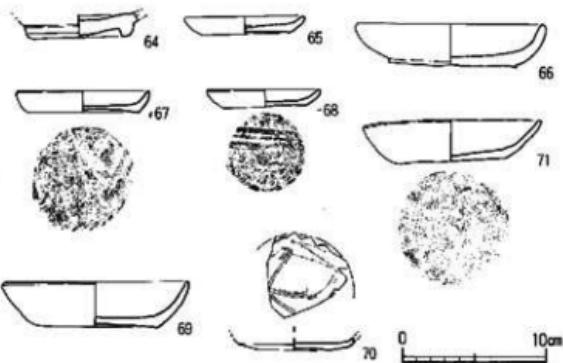


Fig. 22. 223・224・227・255号土壙出土土器実測図(1/4)

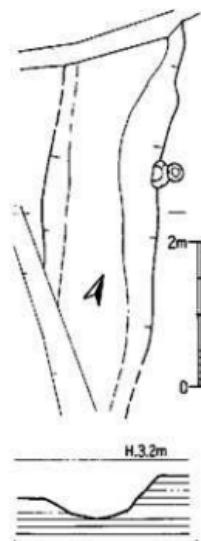


Fig. 23. 233号溝実測図(1/80)

(3) 溝遺構

第2面では、調査区の西端で1条の溝を検出した。溝はほぼ磁北方向に沿い、町割りの一画を示すものであろう。また、この溝の東側にはこれに柱筋を並べた掘立柱建物跡が建つ。

233号溝 (Fig. 23. PL.5)

調査区の西端で検出した溝で、磁北方向より4°ほど西へ振れている。溝幅は、検出面で2.0~2.1m、底面で80cmを測る。深さは45~50cmを測り、北へむかって低くなる。覆土は、暗茶褐色土~黒褐色土で、溝内からは少量の土師器皿に混じって骨片も出土している。

(4) ピットと包含層の遺物

第55次調査区の基層をなす黄白褐色砂層上には第2面の遺構面がある。その上層には、褐色~暗茶褐色土が20~30cmほどの厚さで堆積しており、その上面に第1面に遺構面がある。この第1面と第2面との間の土層中には14~16世紀代の遺物を含み、ここでは分層せずに一括して遺物包含層として取り扱った。ただし、その遺物量はあまり多くはない。

また、ピットは中には明確な柱痕跡が検出されたものや柱筋の通るものもあり、建物址等の構造物を構成したと考えられるが、調査区が狭小な故に全体像を把握できるものはなかった。

出土遺物 (Fig. 24・25・26. PL.8)

72~82は中国青磁。72は龍泉窯の貼付文小碗。内外壁に凹線を縦に入れ、花形に作るもの。見込に茶溜りを作り五弁花を貼るが、中心をずれている。釉を全体に施した後、疊付を斜めに削って足を露胎にしている。73~74は口縁がやや肥厚する端反碗の小片。74は内面に印花蒂弁文が見られ、口唇に刻を入れたスカラフ

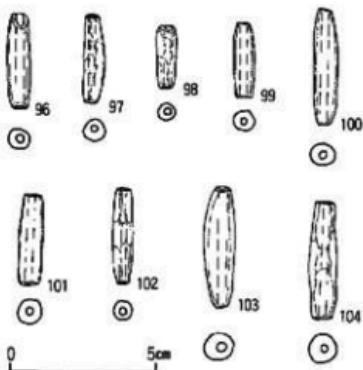


Fig. 24. 土鍾実測図(1/2)



Fig. 25. 銅錢拓影(1/2)

口縁である。75は剣先蓋弁碗で、剣先とドの縫線は明瞭な連絡を失い、やや後期に属する。76はやや大形の鉢になろう。内面に印文、外面に簡単な割花文が見られる。釉色は暗緑色で透明性に欠ける。77は碗で、褐味の黄褐色の砂が沢山混じる。釉は褐味のオリーブで透明性がある。見込は円形に釉切りされ、疊付から外底も露胎である。78は龍泉窯刻花雷文碗で、釉はくすんだオリーブ色で透明性に欠ける。口縁下に回文が刻花されている。内面にもヘラで刻花が施される。79は皿で、胎土は細かく熔融している。釉は淡い青緑色で、気泡が沢山は入るため透明度は低い。疊付から外底は露胎で、見込も円形に釉切する。80は龍泉窯皿。釉は灰オリーブ色で、釉中に大小の気泡がびっしり入り不透明である。釉は高台を包んでいるが、外底は円

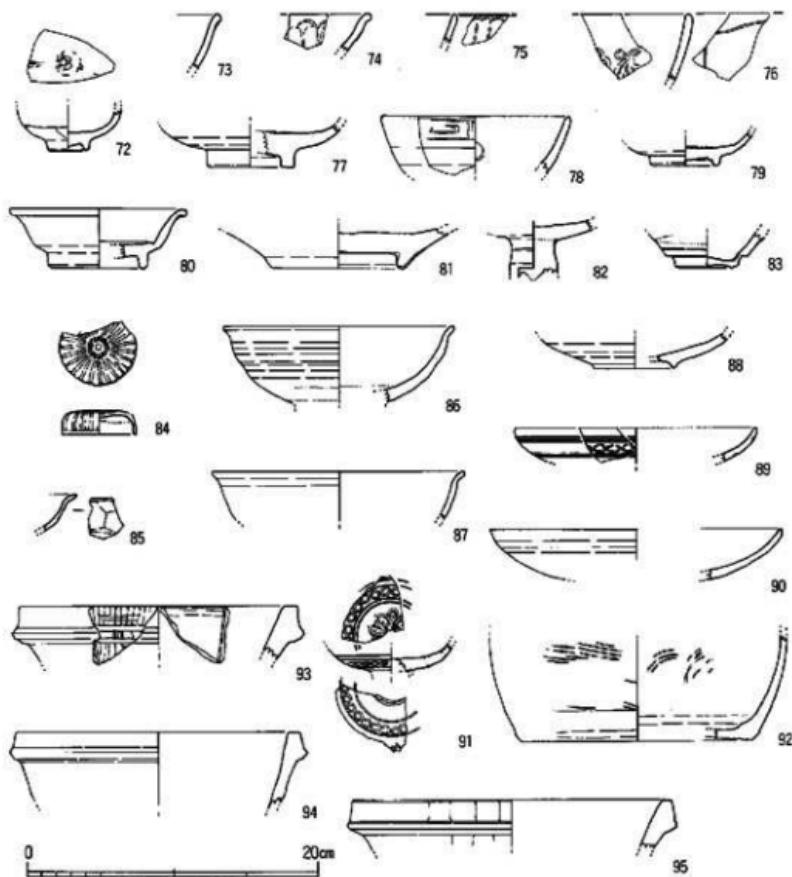


Fig. 26. 包含層出土土器実測図(1/4)

形、もしくは輪状に釉切されている。81は龍泉窯盤で、胎土は淡灰色でよく熔融している。釉はオリーブ色で厚く、0.1mm程の気泡がびっしり入り不透明である。見込に蓮花様の印文がある。全体に施釉の上、外底で輪状に釉切している。82は龍泉窯馬上坏で、胎土は褐味の薄灰色。よく熔解している。釉はオリーブ色。釉中に気泡があり多重貫入が入っている。脚は貼り接ぎである。83は黒褐釉碗の所謂天目形の碗。見込の広い特徴のある形である。84は青白磁合子蓋。胎土は細かい白で、よく熔けている。釉は青みのある透明釉で水裂が入る。型作りの菊花形で、宋代の遺物と考えられる。85は白磁八角坏である。森田分類D群の白磁で、焼の甘いグループのもの。86・87は白磁端反碗。褐味の灰色の細かい胎土はよく熔融している。釉は灰色の透明釉。88～92は李朝陶器。88は皿で、細かい灰色の陶質。釉も灰色で熔けず白済している。89も皿で、胎土は細かい灰色。陶質。釉は透明の光沢釉。釉下に白土で象嵌している。口縁下に線文を施し、その間に点綴円形文を並べている。90は無文の皿。91は白黒二色の土を作つて象嵌を施している。底部には胎土を貼り付けて高台を作つたように見える破面がある。通常の高台がつくには底が小さく馬上坏のような脚が付くとすれば考えやすい。92は褐釉壺、もしくは船德利のような形であろう。胎土は煉瓦色からチョコレート色を呈し細かい。釉は褐色のうすい釉で、底部や器内部はよく熔けず白済している。内面に青海波、外面には平行の叩目が残る。底部に貝を敷いて焼成した跡が少し残っている。93～95は滑石製石鍋である。97～99はピット出土、101～104は包含層出土の小型の土錐で、長さは2.1～4cm。

IV. おわりに

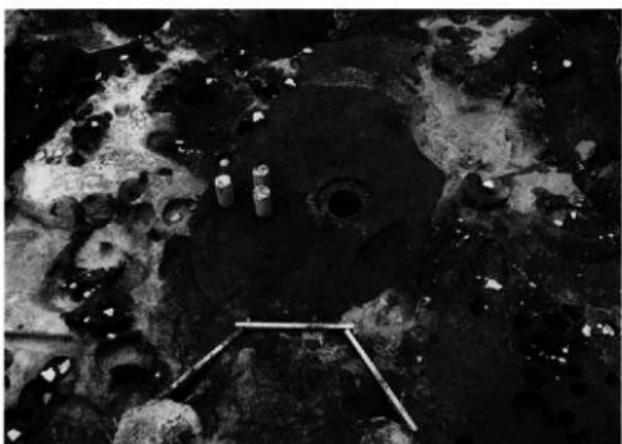
第55次調査区は、博多遺跡群を構成する「博多漬」と「沖ノ漬」の二つの砂丘のうち、湾口に面する「沖ノ漬」の最も海岸よりの縦斜面上に占地している。

発掘調査では、砂丘基盤層上とその上層に堆積する遺物包含層の上面で2面の遺構面を検出した。しかし、この検出面はあくまでも便宜的なものであり、その面の遺構の絶対的な年代観を示したものではないが、概ね14～15世紀代に納まるもので下層の遺構群はこれよりもやや遅る様相を示している。検出した遺構は、井戸跡、掘立柱建物跡、土壤、溝等がある。この中でも掘立柱建物跡は、柱穴内に扁平な転石を敷いて礎石となし、軟弱な地盤上での工法の特性をよく表している。この現象は、砂丘上に立地する博多遺跡群において往々にして観られる特長である。一方、下層面では南方80mに位置する第46次調査区第2面のSD-06のほぼ延長線上にあたる南北方向の溝が検出された。第1面の掘立柱建物跡は、この溝と柱筋を同じくして合い接しその濃密な繋がりを窺わせる。これが町割りの溝と区画された域内の建物跡とすれば、博多の町に一般的な間口が狭くて奥行が長い所謂「狭い寝床」とは様相を異にし、湾口に面した砂丘「沖ノ漬」の開発の初現や町割り等の在り方を検討するうえで重要な意味をもつものと考えられる。尚、検出遺構面の差異は包含層中の検出による技術的限界に起因する。

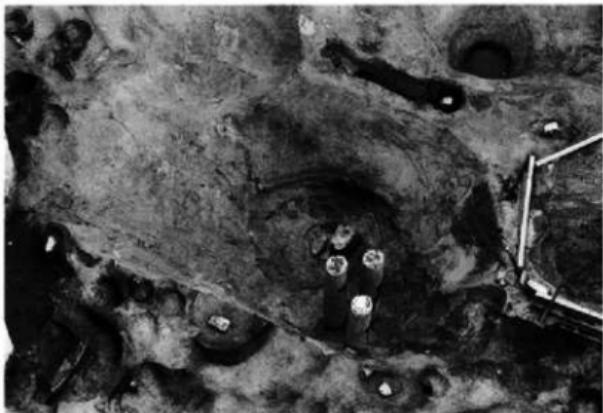
(1) 第1面調査区全景(西より)

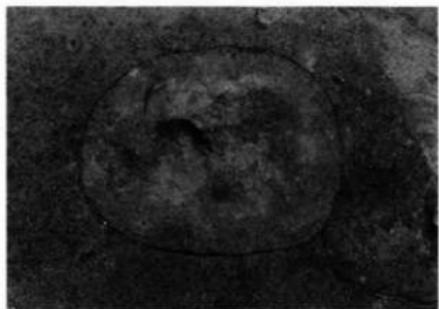


(2) 第1面調査区全景(南より)

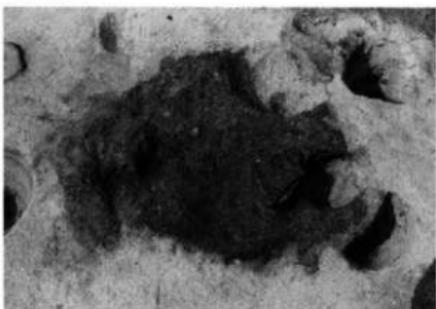


(3) 158号井戸(西より)





(1)101号土壤(北より)



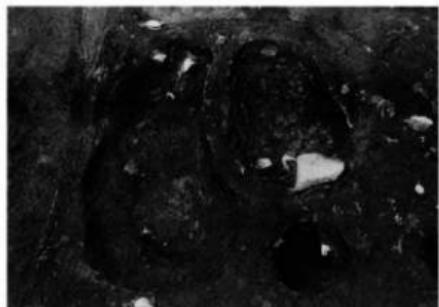
(2)102号土壤(東より)



(3)103号土壤(西より)



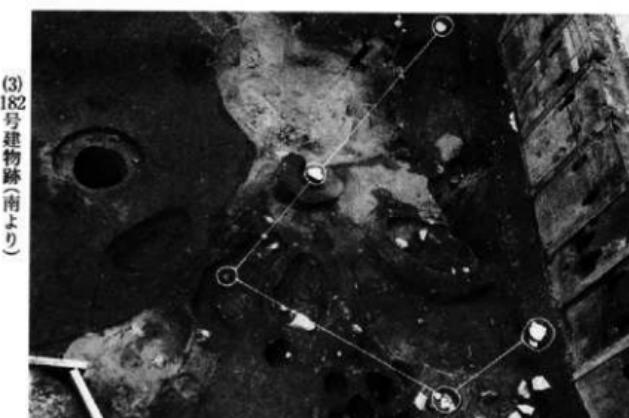
(4)104号土壤(南より)



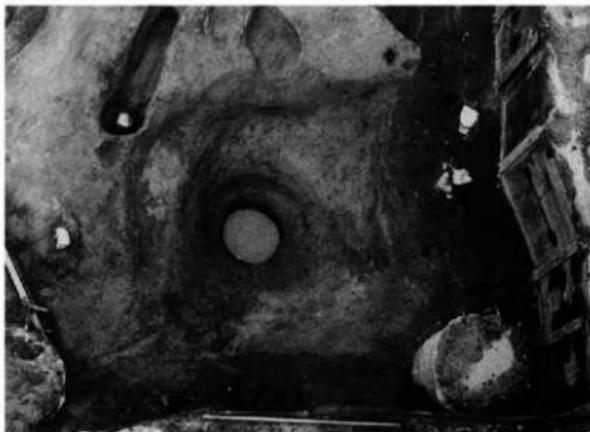
(5)145・146号土壤(南より)



(6)148号土壤(西より)



(1)
201号井戸(南より)



(2)
201号井戸土層断面(西より)

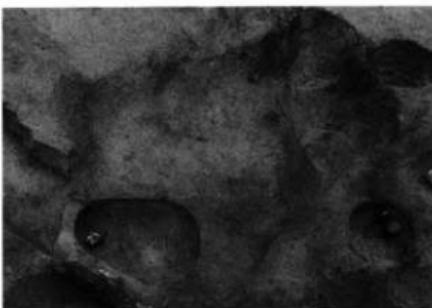


(3)
201号井戸柾検出状況(西より)





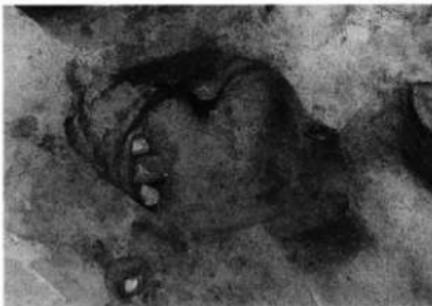
(1)222号土壤(北より)



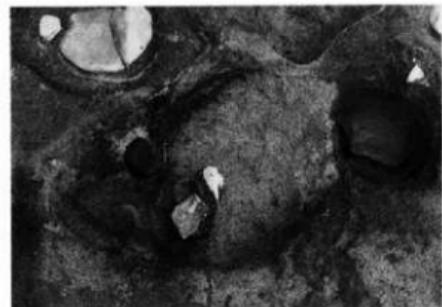
(2)228号土壤(南より)



(3)242・243・250号土壤(北より)



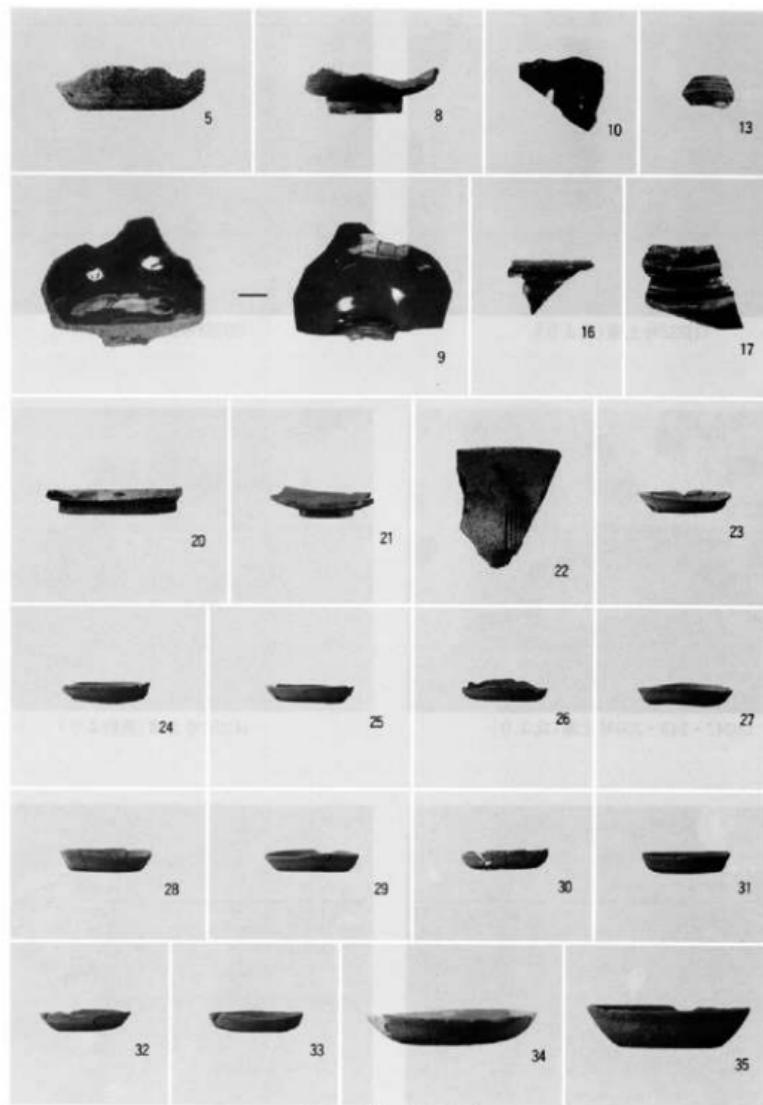
(4)250号土壤(南西より)



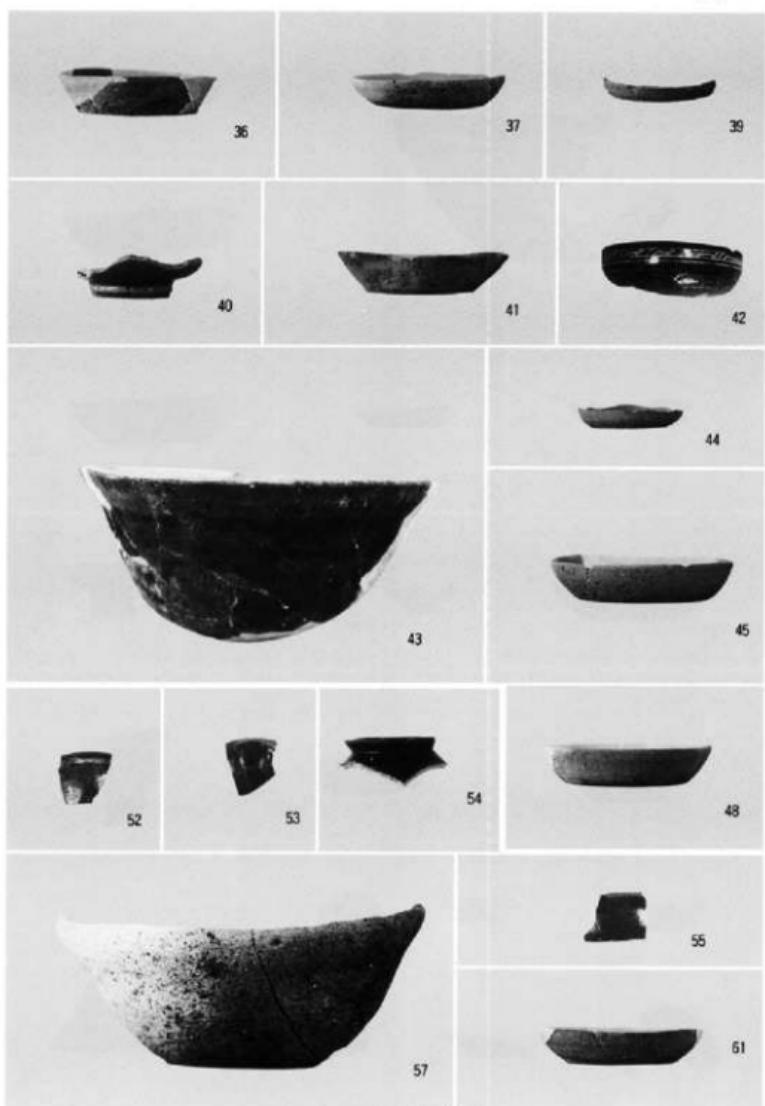
(5)227号土壤(南より)



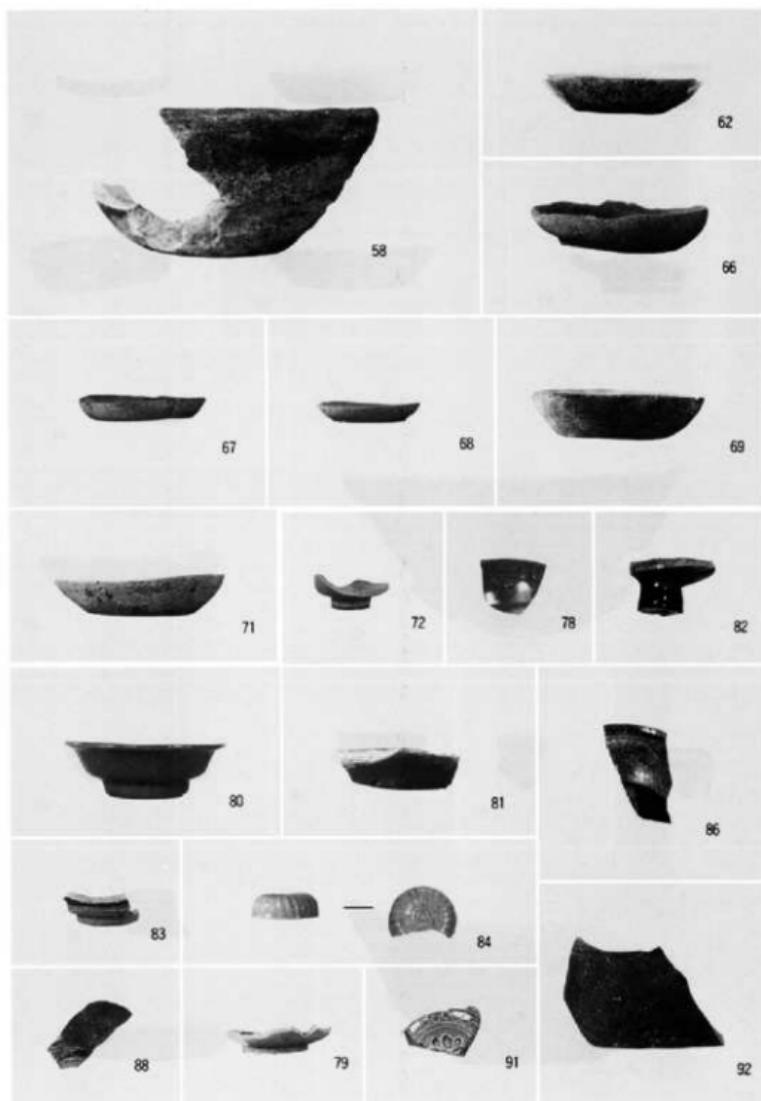
(6)233号溝(南より)



第1面出土土器(1/4)



第1・2面出土土器(1/4)



第2面・包含層出土土器(1/4)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第327集

博多35

—博多遺跡群第55次調査—

1993年 3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1-8-1

印刷 栄光印刷株式会社